



Data 2023-75

監督・脚本：ポール・シュレイダー
製作総指揮：マーティン・スコセッシ

出演：オスカー・アイザック/ティファニー・ハディッシュ/タイ・シェリダン/ウィレム・デフォー

👁️👁️ みどころ

私はマージャンは大好きだが、丁半バクチや競輪、競馬は嫌い。トランプでもセブンブリッジは大好きだが、ポーカーは嫌いだ。しかし、本作の主人公が刑務所生活10年の中で会得した「カード・カウンター」とは？そして、彼がスタートさせたギャンブラー人生とは？

本作はポーカーをテーマにしたギャンブルもの？そう思っていると、意外や意外、捕虜収容所の残忍な風景が登場し、『キル・ビル Vol. 1』（03年）『キル・ビル Vol. 2』（04年）並みの復讐劇になるからビックリ！しかし、私の目には、本作はポール・シュレイダーとマーティン・スコセッシのコンビによる大ヒット作、『タクシードライバー』（76年）のような魅力にはとても、とても・・・。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■賭け事あれこれ！ポーカーの面白さは？■

私は賭け事が大好きだが、他人（？）に運を委ねる丁半バクチや競輪、競馬、競艇等は嫌いで、ゲーム性の強いマージャンやトランプが大好き。トランプでも、運任せの賭博ゲームであるポーカーやブラックジャックは嫌いで、セブンブリッジやナポレオン等の知的ゲームが好きだ。ちなみに、本作中のセリフにも登場する、ポール・ニューマンが主演した『ハスラー』（61年）はトランプのポーカーではなく、ビリヤードの勝負がテーマだったが、ビリヤードも賭け事であると同時に技術を競うものだ。他方、囲碁、将棋、チェスは運の要素も少しはあるが、99.9%実力のゲームだから私は大好きだ。

ちなみに、私の診断（見立て）では、麻雀は実力8割、運2割？『カード・カウンター』と題する本作は、「カード・カウンター」方式（？）によるブラックジャックを得意とする主人公ウィリアム・テル（オスカー・アイザック）が、なぜかポーカーの勝負にはまっ

いく物語。しかし、私の診断（見立て）では、ポーカーは実力2割、運8割だから運に左右され過ぎでは・・・？もちろん、ウィリアムの意見はその正反対だろうが・・・。

■□■さすらいのギャンブラーの本性は？■□■

“さすらいのギャンブラー”と聞けば、何ともカッコいい日本語の響きだが、本作のウィリアムはまさにそれ。もともと、10年間の刑務所生活の中で完全にマスターしたという「カード・カウンター」に自信を持っているものの、ウィリアムのギャンブル哲学は“小さく賭けて、小さく稼ぐ”というものだから、アレレ。それは一体なぜ？それは、本作導入部で見るカジノ会場を去った後、安物のモーターの部屋で1人静かに眠るウィリアム独特の習慣を見ればよくわかる。しかし、なぜ彼はそんなスタイルに固執しているの？

そこで“あつと驚く展開”を見せるのは、スクリーン上に映るウィリアムの夢の中に登場してくるアブグレイブ捕虜収容所での捕虜への尋問（拷問？）風景。ウィリアムはこれに関与していたとして有罪判決を受け、10年間米国軍刑務所に服役したそうだが、それって一体なぜ？なぜウィリアムだけが刑務所に？上官たちはどうなったの？このように本作は、なぜ？なぜ？なぜ？の連発の中でストーリーが進んでいく、ミステリー的展開に・・・。

■□■主人公に絡む2人の男女に注目！■□■

本作の制作総指揮にマーティン・スコセッシの名前があるのは、本作の脚本を書き監督したポール・シュレイダーが、かつてマーティン・スコセッシと組んで『タクシードライバー』（76年）を大ヒットさせたため。同作では、ロバート・デ・ニーロ扮する元海兵隊員でタクシー運転手志望の男と、当時13歳だったジョディ・フォスター扮するコールガールとの奇妙な友情と意外なストーリー展開が魅力だった。

それに対して、本作では第1に、ウィリアムの腕を見込んで「大金を稼げるポーカーの世界大会」への参加を持ちかけてくるギャンブル・ブローカーの黒人女性ラ・リンダ（ティファニー・ハディッシュ）、第2に何やら曰く因縁ありげな雰囲気ウィリアムに接触してくる若者カーク（タイ・シェリダン）が登場するので、彼らのキャラとストーリー展開に注目。

他方、ウィリアムがカークとはじめて出会ったのは、ウィリアムがジョン・ゴード（ウィレム・デフォー）の講演会に参加したためだが、このゴードこそウィリアムの軍隊時代の上司で、ウィリアムに生涯消えない罪を背負わせた上、自らは優雅な生活を送っている男らしい。すると、本作は『カード・カウンター』というタイトル通りのトランプゲームをネタにした博打映画ではなく、クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル V o 1. 1』（03年）（『シネマ3』131頁）、『キル・ビル V o 1. 2』（04年）（『シネマ4』164頁）のような復讐モノ・・・？

■□■同時並行する2つのストーリーの出来は？■□■

真田広之が主演した『麻雀放浪記』（84年）やTV放送されている『むこうぶち』シリーズは、マージャンのゲーム（試合）風景を観ているだけでスリルいっぱいだが、本作に

みるポーカーの試合は全然面白くない。“小さく賭けて、小さく稼ぐ”主義のウィリアムと対比されるのが、勝つたびに「USA! USA!」と騒ぎ立てる“ミスターUSA”なるギャンブラーだが、こんな男を登場させても、私には本作のポーカーゲームに何の面白みも感じられない。したがって、リンダのアレンジの下でウィリアムが決勝戦まで駆け上がっていくシーケンスは全然ダメ。

他方、カークはなぜウィリアムに接触してきたの？それを巡るストーリーは、ジョン・ゴードをキーマンとして、かなりシリアスなものになっていくから興味深い。もっとも、そんなカークに対して、ウィリアムは大金をはたいて「復讐を断念し、母親の元へ帰れ」と諭したのだが、さてカークは・・・？

■□■ハイライトの復讐シーンはアレレ・・・■□■

『キル・ビル』は個性派監督タランティーノらしい魅力的な作品だったが、そこでは当然ド派手なアクションも見モノだった。それに対して、本作はウィリアムがせつかく勝ち上がったポーカーの決勝戦を放り出してしまうストーリー展開がイマイチなら、ウィリアムがゴードに復讐を遂げるシーケンスもイマイチだ。ゴードの家の中に先回りして入り込んだウィリアムが1人椅子に座り、戻ってきたゴードを驚かせるという演出は「さすが！」と思わせたが、その後、拷問道具一式を詰め込んだバッグを手にゴードを別室に連れて行った後は・・・？そこでの“復讐シーン”が本作のハイライト！私はそう思ったのだが、アレレ、アレレ、アレレ。そんな私の不満は、あなた自身の目でしっかり見てもらいたい。

■□■冒頭も刑務所！ラストも刑務所！■□■

ちなみに、あなたは『大脱走』（63年）のメチャ面白いストーリーと、成功したかに見える“大脱走”に失敗した後のスティーブ・マックイーン扮するヒルツの姿を覚える？野球大好き人間の彼は、捕虜収容所に入っている時から1人でグローブとボールで遊んでいたが、なぜか同作のラストも同じシーンになっていたはずだ。

しかして、本作は10年の刑期を終えて刑務所から出てきたウィリアムが「カード・カウンター」を会得した優秀なギャンブラーとして、「小さく賭けて、小さく稼ぐ」ところからスタートしたが、なぜかラストで彼は再び刑務所内に！そして、そこに面会にやってきたラ・リンダとのガラス越しのシーンで終了するが、そんな本作の結末にあなたは納得できる・・・？

2023（令和5）年6月23日記